
盗賊王女をコーディネート！

ジグザグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊王女をコーディネート！

【Nコード】

N6094N

【作者名】

ジグザグ

【あらすじ】

高校三年生の夕風奏は友人と遊びに行く予定だった。しかし家を
出るとそこは……何故か森の中。
ゆうなまかなで

訳も分からず異世界に飛ばされた奏に精霊が囁くお願いは……森で
出会った女性を綺麗にする事！？

「ふふふ、やってやろうじやありませんか。この美人さんを私色に
染めてあげますよ」

コメディなんだかシリアスなんだか作者もよく分かってない感じで

進んでいきます。

ちよっぴりガールズラブ要素が入る予定です。

1話 扉の向こう（前書き）

まだ他の作品も終わってないのに何故か新作を書いてしまったアホな作者です。

……さすがにこれ以上増やすことはありませんよ……

1話 扉の向こう

夕凧 ゆうなぎ 奏は かなで この日は友人と原宿に遊びに行く予定だった。

奏はつい最近オフ会で知り合った男に失恋した。

失恋した直後はすっごく泣いた……なんて事はなく怒りで震えていた。

彼は付き合えない理由をこう言ってきたからだ。

——ごめん、子供はちょっと……

ちなみに年を聞いたらその人は同じ年だった……

奏は高校三年生なのだが、140cmしかない小柄な体格や、まだ幼い容姿からよく中学生、時には小学生に間違われるのがすごいコンプレックスだった。告白されても怪しいロリコンみたいな人ばかり。逆にこちらから告白しても今回の様に、子供とは付き合えないみたいな態度を取られては振られていた。

ちなみにそのオフ会で知り合った男にはピントを一発かましてやった。

その後は連絡を取ってない。

それでも思い出すたびにイライラとしていたら、同じクラスの友人がパーッと遊んで忘れようって誘ってきたのだ。その友人の優しさに嬉しく思い、今日は遊ぶぞーって気合を入れてお気に入りの真っ黒で沢山のフリルがついたゴスロリの服を着て家を出たら……そこは森の中でした。

「はいい!？」

玄関のドアがあつた方を振り向いても、何もない。

あるのは緑、緑、緑。

ただ緑ばかり。

こんな自然に溢れる風景を都会育ちの奏は見た事が無かった。

かといって、それに感動している場合ではない。

「な、なんのドッキリですかこれ」

家を出たらそこは森の中でしたって、どんな大掛かりな仕込みなんですか！

早くこの事態を説明してくれる人が来ないかと待っても誰も来ない。気づけば手に持っていたはずのお気に入りバッグの姿も消えている。

仕方なく辺りを探索しようと歩き出すが、そこは全く整備されていない自然の森。

それに対してこのゴスロリの服では歩きにくくて仕方が無い。そもそも山道なんて子供の頃に高尾山を登った経験があるくらいで、こんな獣道なんてテレビの中でしたしか見た事が無い。

なんかもうパニックで泣きそうになってきました……

（何？……人、人はいないんですか）

周囲を見渡しても人っ子一人いない。

幸いにも猛獣や大っ嫌いな虫の姿も見えない事には多少の安堵を覚えただけ。

（一体何が起きたんですか、誰か教えてください）

——た——けて——

「だれです!？」

——たすけて——

突然頭の中から声がしてくる。

子供の様な高い声、その声はまるで泣いている様。

「なに!？ 助けて欲しいの？」

奏はよく子供と間違われていた、しかし子供自体は嫌いではなかった。まだ小学生の従兄弟の面倒をよく見ているせいもあり、子供の扱いには慣れている方だった…… 同年代の様に接してくるのだけは何とかせねばと思っていたが……

——たすけて…… あげて

しかしその声の意味は奏の想像を裏切り、戸惑わせた。この声の主が何なのかは分からないが、誰か別の人を助けて欲しいと切実な声で言ってきたのだ。

しかし周囲には誰もいない。一体誰を？ と奏が聞こうとしたその時、後方の茂みから待望の人間が現れた。

音に反応して振り返り、目の前の人を見た時、奏の動きが止まった。

なんて……

なんて……

なんて残念な美人さんなんですか！

それが最初の印象でした……

1話 扉の向こう（後書き）

という訳で新作です。

感想とかもらえると作者のやる気が尋常じゃなく上がります。

皆さんよろしくお願いいたします。

2話 元王女

「はぁ……やるしかないよねえ……」

酷く気が進まないけど、いい加減腹を括らなければいけない状況に陥ってしまった。

「……もう限界だしね」

以前ならこんな事思いつきもしなかっただろう。自分の心が荒んでいつている事に内心涙を流しつつ、覚悟を決める。

私にはやるべき事がある。

こんな所で倒れてなんていられない。

これは私のエゴだという事は理解している。

ひどく傲慢な考え。

ただ私は私がやりたいように他者を不幸に陥れようとしている。

それは人として最低な行為。

許されるはずの無い行為

——きつと私は死んだら地獄へ行くんだろうね。

そんな考えに思わず自嘲してしまう。

それでも私は引くことは出来ない。

元王女として、王国の再建を夢見て……

まだ日が出て間もない時間、鬱蒼と生い茂る森の中に獣道を独り歩く少女、彼女は簡素な薄汚れたベージュのパンツにやぼったい厚い布で作られた着心地のよくない黒いシャツ、その上からはぼろぼろのフード付き茶色いマントで全身を覆い、腰には使い込まれた茶色

い布袋、反対側には一本の細いショートソードを差していた。その姿はいかにも落ちぶれた冒険者風の出で立ちであり、見る者の同情を煽るほどであった。

ましてやその中身が小柄な16歳の少女であったなら尚更だ。

彼女は歩きながらも、その表情を歪めてこれからすべき事を思索していた。

（決めたはいいけど、とりあえずはこの森を抜けないとね）

こんな人っ子一人いない場所では目的を果たせはしない、と歩く速度を少し速める。

その前を向いた大きな青い瞳は強い眼差しをしていた。

彼女は首元で揃えられた銀色の髪に手を入れ、暫く洗う事もできずに痒くなってきた頭をかきながら前を進む。

（川とか無いかな……うう、身体も最近洗えてないし……臭う……かなあ）

王国にいた頃は当然こんな事で悩む事はなく、彼女は王女シルファ・ルト・エトワールとして大切に扱われていた。周りには常に何人もの侍女が身の回りの世話をしてくれ、毎日毎日豪華な食事にありつけていたのだ。当然湯浴みだって毎日していた……それが3年前の戦争で王国は滅び、彼女のいたルト王国は隣国であったアルツァイスト王国に支配され、生活は一変した。

戦争の際、彼女は周囲の協力により何とか逃げ出したものの、他の王族は全て処刑されてしまっていた。そして彼女も分かり次第処刑されてしまうような絶望的な状況に陥ってしまう。

行く当ても無く、その身を隠しながら彷徨っていた彼女は、身に付けていた物売りさばく事で暫くは過ごしていた。しかしそんな生

活が長く続くことも無く、その生活はすぐに破綻してしまったのだ。それから彼女は冒険者として、各国にあるギルドからの依頼を受ける事でなんとか食いつないでいた。

ギルドは各国の大きな街に必ずといっていいほど存在している。

冒険者は本来未開の地の探索をする事を目的としていた者であり、その彼らを支援する為と生まれたのがギルドであった。

彼らはその目的の為、様々な国を渡る者が多い。しかしそうなってくると問題になるのが敵対国同士の間人間が出会う事である。その為に昔はいざこざが多くあったが、それを問題視したギルド側が、例え敵対国の人間同士であろうと冒険者同士では争ってはならない、と不戦協約が結ばれ、それを破った場合全てのギルドから依頼を受ける事ができなくなってしまう。結果、まあ多少の小競り合いはあるが表立って問題になるような事は少なくなった。

彼女は王女として過ごしていた際に覚えた剣術と魔術の腕でなんとか冒険者としてこの三年間過ごしてきたのだ。

当初は遊びのつもりだった剣術、しかしどうやら彼女には才能があったらしく、その腕はすぐに上達し、今では並みの剣士では太刀打ちできないほどになっていた。

そんな彼女は王国ではお転婆姫として有名だった。そしてまた彼女自身もそれを自覚していたのか、ドレスで着飾ることなんかより、戦う事に興味を持ち始め、遂には魔術にまで手を出したのだ。

魔術の方は剣術ほどの才能はなかったが、その類まれなる剣の腕に魔術を混ぜながら戦う彼女は、他の冒険者よりも格段に強かった。

……とはいえ彼女は箱入り娘。今では多少逞しくなったとはいえ、王女から冒険者として生活していく苦勞は並ではない。それになにより世間というものに疎かった。

つい最近もあこぎな冒険者に騙され、報奨金を殆ど持っていかなかったのだ。

それは一週間ほど前、半年ほど滞在していた街、フェアリースでの出来事だった。

とある四人の冒険者に一緒に協力して依頼をしないかと持ちかけられたのが始まり。

その依頼は近隣の森に最近住み着いた獰猛な魔物『フェンリル』を二十体退治する依頼で、そこそ高ランクな依頼だったのだが、彼女からすれば一人でもなんとかなるものだった。

しかしずっと一人で寂しかった彼女はそれを二つ返事で了承してしまったのだ。

そして依頼自体は無事達成された。しかし、フェンリルは殆ど彼女が倒したにも関わらず、彼らとは報奨金を人数で均等に分けた。彼らは四人、彼女は一人。更には依頼を持ってきた仲介手数料やらフェンリルのいた住処の情報料、移動で馬車を使用したお金、など色々と請求されてしまい、報奨金は9割が彼らの懐に入っていく、渡されたのは数日程度の生活費にしかない微々たる物だった。

しかし彼女はその場はそんなもんかと納得して、誘ってくれてありがとう、とお礼まで言ってその場を後にした。

後日、周囲から騙された事を知る、住処や馬車などは全て依頼主からの必要経費で出ていたし、それに彼らは四人いたが四人で一つのチームなのだから報奨金は折半するものだとかえられた。その事を知った彼女は彼らに抗議をしにいくが、彼らは小馬鹿にしたような態度で、納得して受け取っただろ？ お礼まで言っただじゃねえか、と彼女を笑いものにしたのだ。

彼女は言い返せず、悔しくなって涙を瞳に浮かべて、彼らとはもう

会わないよう何も考えずにすぐさま街を後にしたのだ。

そしてこんな風に騙される事は日常茶飯事だった。

買い物をするばばったくられるのは当たり前。

おいしい依頼だと思ったら、報奨金を貰う時になっていちゃもんを付けられては値切られる。

病気を治すお金が無くて死にそうなんです、と言われて思わずけなしの全財産を渡した事もあった……その後その人の姿を見ることが無かった。

腕の立つ世間知らずの冒険者、それもまだ若い少女。それは世間の荒波に揉まれた生活をしている人間達にとってはいいい力モだった。

更に彼女は親しい人間を作らず、また一箇所に留まらないようにしていた。

というのどこから正体がばれるか分からないという不安があったからである。

しかしその思いに反して独りは寂しいとも感じていた。それがまた騙される要因の一つなのだが……

そんな訳で、彼女は冒険者としてギルドの依頼達成率は高いのだが、その懐は一向に暖かくならなかった。

（あう……お腹すいたよ……）

少ない報奨金は昨日までの食費に消えてしまい、今はもう手元には無い。

目的地のギルドがある街までは遠く、徒歩では一週間以上はかかる。その間食べる物も無くては当然だが餓死してしまう。

数時間歩いた所に小さな村があるのだがお金が無ければ食料を
買う事できない。

そこで彼女が思いついた案は

(……襲おう)

……盗賊稼業だった。

2話 元王女（後書き）

という訳で、元王女は盗賊にシヨブチエンジしました。

3話 最低な出会い

（そうよ、世の中なんて自分の事だけを考えて私腹を肥やすような人間が成功するのよ！ 私だってそっち側に回るべきなのよ！）

王国を離れた三年間の生活は、とても元王女とは思えない程に彼女の心を荒まさせていた。

（今こそ覚悟を決める時なのよ！ 例えどんな事をしてても、私は悲願を果たすまでは死ねないのよ！）

とはいえ、さすがに人殺しまでする気は彼女には無かった。

食料を売っている店を見つけ、剣で脅して奪い取る。

その考えは盗賊というかどちらかという強盗に近い。

身体が緊張するのが分かる。

まだ村までは距離があるとはいえ、これからする事を考えると段々弱気になってくる。

基本的に気が弱い小心者なのだ。

——貴方は優しすぎる……

そんな時、脳裏に浮かんだのは剣術を教えてくれた人。近衛騎士であり、姉のように慕っていた優しいミリアリアの言葉だった。

城内が襲われた時、まだ20代後半で近衛騎士として一番若かったミリアリアは王の命により、シルファと共に城を脱出した。

しかしミリアリアは城を抜け出した後、また城内に戻ってしまった。その整った顔立ちを苦痛に歪めながら、

——騎士として……最後まで国と共に有ると……

泣きながら引き止めたが気絶させられ、目覚めた時には全て終わった後だった。

——貴方は優しすぎる、戦う事には向いていない

……それをよくミリアリアから言われていた。剣術の才能はある、魔術も使える、けれど貴方は戦うべきではない。王族だからではなく、ただ、貴方は優しすぎる。時には非情にならなければ戦い続ける事はできないと。当時は分からなかったが、この三年間の生活で身に染みる程実感した……けれど、それでもやらなければならぬ……例え道半ばで倒れたとしても……父と母、そして滅ばされたルト王国の無念に報いる為にも、私は最後まで逃げ出すわけにはいかない。

敵国アルツァイスト王に一矢報いるまで私はこの剣を振り続ける。同盟国だったアルツァイスト王国が急に攻め始めたのは、新しい王に変わってすぐの事だった。

まだ若い王は長年続いた同盟を一方的に破棄し、こちらの体勢が整う前に奇襲をしかけてきた。

……それは一方的な虐殺だった。

(……絶対に許しはしない)

城が燃え盛り、逃げ惑う人々の悲鳴は今でも脳裏に焼きついて離れない……

アルツァイスト王のした非道な行為を忘れて、静かに生きるなど出来るわけがない！

ミリアリアが言うように戦い続ける事に優しさが邪魔だというのは捨ててやる。

いつかアルツァイスト王の喉下へ剣を突き刺し、今は亡きルト王国の無念を晴らすその日まで。

弱気になっていた心に闇が進入してくる。

そこには先程までの小心者の顔は無く、ただただ復讐を願う悪鬼がそこにいた。

そんな決意を新たにしていた時、ソレは現れた。

目の前に見た事の無いような可愛らしい人形……いや少女が現れたのだ。

この鬱蒼とした森の中では馬車も通れないため、徒歩で移動するしかないのだが、そんな物好きは少なく、結果として人に会う事は殆ど無い。

現に彼女も森に入って五日経つが、人に会うのは初めてだった。

しかもそれがどう見ても粗野な冒険者や近くの村人には思えない可愛らしい少女だった。

恐らく11、2歳だろうと思われるあどけなさの残る幼い容姿をした少女。そのとても小さな顔は驚きに染まっていた。しかしそれはこちらと同じだろう。

自分よりも頭一つ小さい小柄な少女は黒い髪に黒い瞳をしていたのだ。それはこの大陸では希少な色だった。

（この子は一体？）

腰まである黒い髪には艶やかさがあり、またその肌は真っ白で、汚れを感じさせないその雰囲気からはどこぞの高級貴族のお嬢様のように見える。とてもこんな森の中を歩く様な人間ではない。

更にその少女は見たことの無い服装をしていた。

一見して精巧な作りだと分かるその服は、高価なものだろう。その

髪や瞳と同じく真っ黒なドレス。

長袖の黒い服には沢山のフリルが使っており、真っ黒な長いドレススカートはふわりと膨らみ、足には黒い靴が履かされている。頭には黒い蝶の様な小さなリボンがしてあり、また可愛らしさを際立たせていた。

この服装は少女の世界では所謂、ゴスロリと呼ばれる物だったが、それを彼女が知る事は無い。

「あゝ？」

その少女の小さなく唇から紡がれた言葉を聞いた瞬間、固まっていた身体が動き出す。

腰から素早く剣を引き抜くと、少女の首下に剣先を突きつけた。

「え？ あ、あの？」

恐らく少女は現状を理解していないだろう。

その困惑した表情からは怯えが見えない。

だから彼女は分かりやすく言葉にした。

「金を出しなさい」

それが異世界からの来訪者、夕凧ゆづなぎ 奏かなでと元ルト王国王女シルファルトⅡエトワールの最低な出会いだった。

3話 最低な出会い（後書き）

なんだかシルファの話がやたらシリアスになりそうですが、奏がその辺を上手くコメディにしていけますよ。

4話 残念な美人（前書き）

み、短い…… 1話の続きです。

4話 残念な美人

森でようやく人に会えたと思ったら、なんとも残念な美人さんでした。

彼女はまるでアニメとかゲームに出てきそうな冒険者のコスプレをしていました（但しボロボロです）

彼女はまるで映画に出てくるような綺麗な西洋人の顔立ちでした（但し所々黒く汚れています）

彼女はショートカットでさっぱりとした銀髪に碧眼でした（但し髪は油まみれです）

彼女とは数メートル離れているのにちょっと臭ってきました（キュウリの腐ったような臭いです）

（何ですか！？ ちゃんとした格好して、ちゃんと身体洗えばすつごく綺麗になりますよ！）

思わず心の中で悲鳴をあげてしまいます。
目の前にいる大人っぽい感じの西洋系綺麗美人の姿に哀れだと思いつつも、同時に憤りも感じました。

（私だって、これぐらい綺麗ならあんな振られ方なんてしないのに！）

子供っぽい自分にコンプレックスを感じている身としては、これほどの見た目を持ちつつそれを活かしていないというのは絶対に許せません。

とはいえ、そこは弱気な日本人の私。

それをストレートに伝える事なんてできません。

そもそも彼女はどう見ても日本人に見えないので日本語は通じなさそうです。

いえ、それでももしかしたら日本語を知っているかもしれないし、勇気を出して声をかけてみましょう。

「あの〜？」

と、無難な感じでへらへらと笑顔を作りつつ、声をかける。

「え？ あ、あの？」

すると何故だが、コスプレの道具と思われる剣を突き出してきました……喉下に。

いくら作り物だろうとはいえ、ちよつと怖いです。

それに何より彼女の目つきがすごく怖いです。

「金を出しなさい」

はい？

夕風奏、18年間の人生で生まれて初めて強盗に会いました。

4話 残念な美人（後書き）

話の視点を رفتたり来たりさせてるのですがどうでしょう？
時間軸が戻ったりするのは分かりにくいかなあ？

色々と試行錯誤しながら進めていきます。

感想批評などありましたらよろしくお願いします。

5話 精霊さんのお願い

パニックになりそうな頭をなんとか落ち着かせる。

この剣は当然偽者だろうし、彼女のコスプレ姿から見てアニメかなんかの行動だろうと想像する……ほんつつとうに残念な美人さんです
すね！

「あ、あの、偽者とはいえ危ないですから」

そう、あくまでも冷静に対処しないと。この手の人間は興奮すると何をするか分からないってテレビでやってましたし。

それに日本語が通じたのです。きつと話せば分かり合えるはずです！
そう思つて、剣先を手のひらで押し返します。

「ついた！」

「馬鹿っ！ 何してる！？」

え？ え？ き、きれ、切れました？？

ま、まさかこれは……？

「剣先を素手で触るなんて」

ほんものでしたー！！！！

手のひらからはだくだくと血が流れて痛いです。なんだかジンジンしてきました。

……うう……家を出たら突然森の中で、人に会ったと思つたら残念な美人さんで、更には真剣突きつけられて……ぐすっ……

「……………手を貸して」

「え？」

思わず涙ぐんでいたら、残念美人さんが傷ついた手を引っ張ってきました。

「いたっ！」

「……すまない」

そう謝ると腰に下げた布袋から、白い布を取り出し、グルグルと巻いてきます。恐らく治療してくれているのでしょう。

（うん？ この残美^{さんび}さん（残念美人は長いので略しました）は強盗じゃないのでしょうか？）

何故か急に優しくなった残美さんを見て思わず首を傾げてしまいました（それにしても臭いますね）

「え」と、あの？」

「……すまなかった」

なんでも事情を聞いたら、食べるものが無くてついやっちゃったらしいです。

そのボロボロな姿はコスプレじゃないらしいです。

そして話を聞くうちにここは聞いたことも無い世界だったのが分かりました……ハッハッハ、マジデスカ……

とりあえず彼女から聞いた話を整理します。

ここは剣と魔法の異世界です。

まあ！ それなんてファンタジー♪

…… お願いです…… 帰らせて下さい。

—— たすけてあげて

何だか絶望感に打ちひしがれていたら、再び脳内から声がしてきました。それは先ほどと同じ声です。

「だから誰を助ければいいの？」

「ん？ どうかしたの？」

し、しまった…… 残美さんが心配そうにこちらを見てきます。

そりゃ突然変なこと言い出したら心配しますよね。何だコイツ？

つてなりますよね。頭がおかしいって思いますよね…… いや待つて、ここは剣と魔法のファンタジー世界。こんな事は日常茶飯事かもしれないじゃない！

「えーと、なんといいですか、頭の中で声がしてまして……」

「貴方は精霊の声が聞こえるの？」

ビンゴ！ やりましたよ！ やっぱりこんな事ファンタジー世界では日常茶飯事なんですよ。みんな頭がおかしいんですよ！

「珍しいね、精霊士なんて初めて見る」

「…… そうなんですか」

どうやらおかしいのは極少数らしいです。

「精霊はなんて？」

「たすけてあげて、って言ってます。この状況からすると貴方の事

ですかね？」

「いえ、聞かれても困るんだけど……」

まあ、でも多分そうでしょう。精霊さんはきつとこの残美さんが余りにも惨めな姿なので哀れに思ったのでしょうかね。私もそう思います。

という事は私がこの世界にやって来た理由は残美さんを本物の美人に仕立て上げ、立派なレディにする事でしょう。ふふふ、なんだかやる気が沸いてきました。

やっぱり目的ができる人間変わりますね。

それに何より、こんな綺麗な人を自分色に染め上げる……それは、すごく楽しそうです。

「それで、貴方はここで何を？」

おっと、私の事を話すのを忘れていましたね……とはいえ恐らく異世界にやってきました。それも貴方を綺麗にするためになんて言うて通じるのでしょうか？ うーん、無理があるでしょう。それに貴方は残念な美人です、私が綺麗にしてあげます、なんて言って素直に聞くでしょうか？ 私ならブチ切れますね。という訳でそこは隠しつつ、けれど異世界の話はしないと私がすごい常識知らずの馬鹿扱いされそうなので話しました。

当然、向こうは怪しんでいましたが、私の服を見せ、向こうの世界の話をしたら多少は納得したようです。

あ、後は精霊士の事を聞きました。

なんでも精霊の声を聞くことができて、天変地異による災害や、術士に対して悪意を持った人間を教えてくれるといった事ができるようです。

簡単に言うとアドバイザーみたいなものです。とはいえ残美さん

も余り精霊士に関しては詳しく無い様でしたので、他にも何か出来るかもしれませんが。

ちなみに精霊で攻撃、みたいな真似は伝説ではあるようですが実際にできた人間はいないらしいです。

そこまで話終えると、ふう、と疲れたのか残美さんは一息吐きました。なんだか疲れてますね、そういえばお腹が空いていたと言っていました。しかし、残念ながら私は手ぶらです。近くに村があるらしいので、とりあえずそこへ行きましょうという事になりました。

それと残美さんの名前はレンファと言うそうです、家名無しの名前のみです。まあでも私の頭の中では残美さんで変わりませんが。私も自己紹介したら、カナデと呼ばれました。なんだか残美さんの私を見る目が子供扱いなのが気になりましたが、恐らく残美さんは年上（多分20歳前半ぐらい？）だと思われるので仕方ありませんね。

——ちなみにオブラードに包みつつも臭いますと伝えたら今度は向こうが泣きそうな顔になって少し距離を置かれました。よかった、気にしてたんですね、これが普通とか言われたらどうしようかと思いました。

5話 精霊さんのお願い（後書き）

中々話が進みません……ちなみにここからシルファの呼び方はレンファとなります。

6話 痛い子

「金を出しなさい」

そう言い、剣先を突きつける。

剣を持つ右手が微かに震えているのが分かる。手には緊張の為かじんわりと汗が浮かんできた。

私は自分の為だけに私欲を満たす為だけに、この少女を脅して金を奪い取る……それはとても最低な行為。しかしもう剣は抜いてしまった。今更引く事なんてできはしない。

人形のような少女の表情からは焦りは見えるが、それでも緊張感があり伝わってこない。

（理解が追いついていないのか？）

「あ、あの、偽者とはいえ危ないですから」

そう言いだすと少女は何を血迷ったのか自らの手の平を剣先で切った。

「ついた！」

「馬鹿っ！ 何してる！？」

少女の行動に思わず叱責してしまう……元はといえば私が剣を向けたのに

「剣先を素手で触るなんて」

少女の瞳にはみると涙が溜まっていく。
美しい黒色の瞳に涙が溜まっていく姿を見て

(……………無理だ)

やっぱり私にこんな強盗のような真似はできないと思い知らされる。

「……………手を貸して」

「え？」

反応が鈍い、もしかしたら脅えているのかもしれない。

——こんな年端もいかない少女に私はなんて事を……
今更ながら自分のした行為に胸が痛くなる。

「っ！」

「……………すまない」

少し引つ張る力が強すぎたのか、可愛らしかった少女の表情が苦痛に染まる。

(はぁ……………私は何がしたいんだろ)

「え」と、あの？」

「……………すまなかった」

少女の小さな手の平を血止め用の清潔な布で巻いていく。幸い傷は浅く、これなら痕は残らないだろうと思い、少しほつとする

治癒魔術が使えればいいのだろうけど、残念ながら私は風の術士で、治癒魔術を使用できる光属性の魔術は使えない。

属性は、火・水・土・風・光・闇の六属性に分けられる。一人一属性の魔術しか使う事はできず、また属性は生まれつきで決まるため

自分で選ぶ事はできない。

「だから誰を助ければいいの？」

「ん？ どうしたの？」

包帯を巻き終わると、突然目の前の少女が声をあげた。

何やら心配そうな声をしていただけ、会話をするような相手はどこにも見当たらない。

「えーと、なんといいますが、頭の中で声がしてまして……」

「貴方は精霊の声が聞こえるの？」

噂には聞いた事がある。

精霊と会話する事が出来る精霊士。詳しい事は分かっていないが、魔術が使用出来なくなってしまう代わりに、精霊の加護を得るという。

「珍しいね、精霊士なんて初めて見る」

「……そうなんですか」

最も精霊士の力は表には出ない物のため、もしかしたら会っているのかもしれないが、それでも余り聞く事はない。

「精霊はなんて？」

「たすけてあげて、って言ってます。この状況からすると貴方の事ですかね？」

「いや、聞かれても困るんだけど……」

——たすけてあげて……か。確かにこの現状を助けてくれるなら嬉しいけど、私のような個人の為にわざわざ精霊が動くの？

「それで、貴方はここで何を？」

話を聞く限りでは精霊の声に導かれてといった感じなのかもしれないが、それでもやはり不自然さを感じる。例え精霊の導きで会ったとしても、年端も行かない、それも上級貴族と思われるお嬢様が共を付けずに独りで森の中を歩いているのは不自然だ。

しかし話を聞いてみたら、自分は異世界から来たという……成る程……ちよつと痛い子らしい。見た目は11〜2歳に見えたが、もしかしたら発育がいい子で実際はもっと年下なのかもしれない。子供らしい自分の想像した世界を必死に話す姿は微笑ましいとも言えた。ここで少女の言う事を全て否定するのも簡単だけど、それも不躰なものだろう。夢を見られるのは子供の内だけなのだ。現実辛いから、だったら少しでも楽しい夢を見て生きていて欲しいと思う。

今ここにいるのはきつと屋敷を抜け出して来たかなんかだろう。貴族が住むような街は遠いが、子供は時に意外な行動力を発揮するものだ。

例えば街道まで馬車で移動していたが、そこからこっそり抜け出したとか。でももしそうだとしたら誰か探しているのかもしれない。そうしたらあえて動かずに待った方がいいのかもしれないけど、そもそもこの推測が合っているかも分からないし、異世界から来たと言いつける少女からは本当の事は聞けないだろう。

さっきの非道な行いを謝罪する意味でも、せめて自分だけはこの少女の夢を壊さず、安全な場所まで送り届けよう。

そこまで考えて思い出す……お金が無い事に。

お金が無ければ、自分だけでなく少女まで飢え死にしてしまう。仕方なく恥を忍んで少女に聞くが、手ぶらしい。手ぶらでこんな所まで来れる訳ないと思ったのだが、異世界から来たばかりだからと言われた。

（何をしているんだ私は、少女の夢を壊さないようにと誓ったばかりなのに）

自分の浅はかな行動を恥じる。そして少女の無邪気さが羨ましくもあった。

少女に状況を話すと、とりあえずその近くにある村に行ってから考えましようと言われる。迎えを待つという選択肢はやはり無いようだ。

そう、少女の中では異世界から来たばかりで知り合いなどいる訳が無いのだから当たり前だ。

今度こそ少女の言葉に反論せずに黙って一緒に村まで行く事にする。もしかしたらそこに搜索の手が伸びているかもしれないという考えもあった。

自己紹介をするも本名を名乗る訳には行かないので、この三年間使用している偽名、レンファと名乗る。地位が無い平民には家名がない。しかし少女はカナデ「ユウナギと家名があったので、やはりそれなりの地位がある少女なのだろう。しかしユウナギなんて家名は聞いたことが無い。それなりに有名な貴族なら覚えているのだけだ、成り上がりなのかしら？

こうしてお互いの自己紹介も済み、早速出発しようとして歩き出す。その際に手を貸してあげようとしたが、やんわりと断られてしまった。

何故だろう？ と不思議に思ったが、少女の微妙な表情や曖昧な断り方に少し距離を置かれる身体。極め付けに鼻を摘んだりされて、ようやく気づく。

（うわあああ！！ そ、そんなに臭うの！？）

…………… 今度は私が泣きたくなってきた。

6話 痛い子（後書き）

という訳で、カナデは痛い子扱いとなりました。

7話 ナイちゃん

なんでも近くの村まではここから数時間ぐらい歩いた場所にあるそうです。

（この山道を数時間も歩くんですか……）

今はまだ早朝といった感じで、少し肌寒いのは気になりますが、木々の隙間を縫って降り注ぐ柔らかい日差しが気持ちいいので快適といえは快適です……しかしいかんせん道が悪いです。周囲に木の根がありすぎです。何度転びそうになった事かわかりません。

そうなる度に残美さんがオロオロしちゃうので何だか申し訳ないです。臭いなんて気にせず、素直に手を繋いでおけば良かったと今では反省しています。

というか、こうして改めて接してみるととても強盗やるような人には見えません。逆に言うと、それぐらいしなきゃいけないほど追い詰められた生活をしていたのでしょう。

残美さんのみすばらしい姿を見ていると本当に涙が出そうです。

とはいえよく考えると実は私もピンチなんですよね。持ち物無し、お金無し、常識無しと悲惨な状況へ辿りつく為の条件が三つも揃っちゃってます。

そんな中でこの世界の唯一の知り合いは残美さんのみ。残美さんのみなんですよ（大切な事なので二回言いました）

どう見ても生活力ゼロの残美さんについて行って果たして私に未来はあるのでしょうか？

いつそ村で別れた方が私の為かもしれません。

こんな異世界で飢え死になんてごめんです。

しかしここで問題なのが、残美さんと別れると精霊さんのお願いが叶えられないという事です。状況から考えて、きっと私がここに呼ばれたの精霊さんの力なのでしょう。その精霊さんの願いを叶えないと元の世界に戻れないと思われます。

（この残美さんを素敵なレディに仕立て上げない事には私に未来は無いようです）

それにやっぱりなんといつてもこの哀れな残美さんを自分色に染め上げていくという誘惑も強いです。

——あ、あの、私はそんな服……ちょっと露出が

——いやいや、これぐらいが普通ですよ。普通。ささ、早くそんなボロボロな服脱いで下さい。むしろ脱がせますよ

——いやああ、や、やめて……おねがい……

——よいではないかよいではないか

ふ、ふふふふふふふふ。これはやばいですね。すっごい楽しそうですね。鼻血ものですよ。だってこの年上の美人さんが……私の……私の物に……

うん、その為なら少しぐらいの苦勞は苦勞じゃないですね。むしろ苦勞した分悦びが増すという物です。

なんだか妄想パワーでやる気が満ちてきました。精霊さん、私にドーンと任せておきなさい！

——まかせる、まかせる

すると脳内から再び可愛い声が響いてきました。

（あれ？ ひょっとして会話できる）

——できる、できる

（おお、精霊さん精霊さん。お名前はなんですか？）

——名前、名前、無い

（ナイちゃんかぁ。可愛い名前だね。私の名前はカナデ。よろしくね）

——カナデ、カナデ、ヨロシク

なんだか幼稚園児みたいな感じの雰囲気です。すごく可愛いです。いやー、異世界って、本当にいいものですね。

7話 ナイちゃん（後書き）

カナデのHENTAIっぷりは徐々に出していいことと思います（笑）

8話 レンファの想い

小一時間ほど歩いただろうか、初めこそ歩きなれていなかった少女は何度も転びそうになったけど、今では山道に慣れたようだったよりも速いスピードで進んでいた。

「大丈夫？ 疲れてない？」

「はい大丈夫です。山道も慣れてきましたし」

見た目より体力があるのかもしれない。そう言う少女の表情は強がりなんかはなく、確かに余裕が見られた。

（精霊の加護って、身体能力まで上がるのかしら？）

精霊の加護について文献に書いてあったのは、あくまでも助言だけだった筈だけど。

（まあ、精霊土の数が少なすぎて研究が追いついていないだけなのかしらね）

精霊土は人の感情を知る事ができる。最も精霊に人間の心の細部までは分らないが、それでも見た目は笑顔の人間が実は悪意を持って接してきている、そんな事をこっそりと知る事ができるだけでも大きなアドバンテージになる。逆に言うと、自分が精霊土だと知られてしまうと周囲に警戒されてしまうので、精霊土は自らの力を隠すものだという。またそれが研究を遅らせている原因らしい。

（この子は隠さなかったわね。まあ子供だからその辺分かってないだけなのかな？）

「村まではまだかかりそうですか？」

「んゝ、地図を見る限りもう少しかな。思ったより早く着きそうよ」
「そうなんですか」

それにしても…… なんていうか

(……可愛いなあ)

横目でちらりと少女の方を見る。先程から時たま上の空になる少女。恐らく精霊と話しているのだろっ、何やら楽しそうな表情をしていて、見ているこっちまで楽しくなってくる。なんだかさっきまでの荒んだ心が癒されていく気がしてきた。

(どんな話してるのかな？)

精霊との話は頭の中で行われるため、外からは聞こえない。一体この可愛い少女はどんな話をするのか興味がわいてくる(ちなみにその内容は彼女の貞操に関わる物なのだが……それを彼女が知る事は無い)

(……駄目駄目、親しくしたら色々と面倒になるかもしれないじゃない)

少女に興味を持ち始めた自分の心を抑え付ける。

余りの可愛らしさからつい話しかけなくなるけど、距離を置かないと。

懷かれでもしたら大変だ。

そっ、私はあくまでも謝罪のつもりで一時的に安全な場所まで保護

しているだけなのだから。

親しい人間は作らない。それは王国を再建するまで——あの憎き王を倒すまで自分で決めたルール——誓い。

少女は村に置いてもらった方がいいだろう。今は手持ちが無くとも、見た目から上級貴族だと分かる少女。手厚く保護すれば後からお礼はもらえると言えれば信じてもらえるだろう。

後は信頼できそうな村人を探し、少女を任せればいい。幸い少女には精霊の加護がある。悪意のある人間に預けてしまうような事にはならないだろう。

そう考えるとやはり精霊士の力は便利だと思う。戦闘には向かないために軽視されがちだが、普段の生活においてこれほど強力な武器は無いだろう。

（私も精霊士だったら騙される事もないのかなあ……）

はあ、と思わずため息を吐いてしまう。

他人の力が羨ましいと思ったのは初めてかもしれない。

「どうかしましたか？」

思わず吐いて出たため息に反応したのだろう、少女はその可愛らしい顔に心配そうな表情を浮かべて、こちらを覗いてきた。

頭一つ分少女の方が小さいので、こちらを見る瞳は自然と上目使いになる。

（抱きしめたい……）

少女の純真無垢な視線を全身に浴び、ついつい思考がおかしな方向

へ飛んでしまっ。

ぶんぶん顔と顔を振り、邪念を捨てさる。

「なんでもない、なんでもないよ」

「そうですか、ええと、ざん……じゃなくてレンファさん」

「ん？」

ざん、ってなんだろう、少女はおかしな所で単語を区切り、訂正するように名前を呼んできた。

「レンファさんは冒険者なんですよね？」

「そうだけど？」

「いえ……なんていうか女性が独りでいるって危険じゃないですか？」

「まあ、それなりに色々あるけど、大丈夫よ。私強いから」

「そ、そうなんですか」

何故か少しひきつったような顔で返事をする少女。
その表情に少し疑問を持つが、少女は質問を続けてくる。

「レンファさんはどうして冒険者をしているのですか？」

「え？」

「いえ、レンファさんほど綺麗な方なら、他にも道はありそうですし、どうしてわざわざ大変そうな冒険者に？ 親は反対されなかったのですか？」

（き、きれい！ 私が！？ わあ、な、なんだか初めて言われた気がする）

思いがけない少女のお世辞に不覚にも顔が少し赤くなってしまっ。

王城にいた頃はまだ13歳だった為に、可愛らしいと言われた事はよくあったが、綺麗と言われる事は無かった。冒険者になってからは……こんな姿なので……

「べ、別に綺麗なんかじゃないけど……えっとね、わたし少し前に親が亡くなったの。それで他に生きる手段も知らなかったし、私が誇れるのって剣の腕ぐらいだったから」

なるべく深刻にならないように軽く言っただつたが、思いのほか少女の心にダメージを与えてしまったようだ。

不用意な発言だったとその顔が言っている。

言動から痛い子だと思っただけど、それでも相手の心を想える優しい子みたいだ。

だからなるべく気にしてないように軽い口調で話しを続ける。

「それで冒険者をするようになって。最初は色々分からない事も多くて失敗してたけど、今では……え」と……今でも失敗はあるけど、なんそれでもとかやっていけるから大丈夫。それに目的もあるからね」

「目的……ですか？」

「そう、それを達成する為に私は冒険者をやっているの」

なんだか話をしているとまるで少女の方が年上のように見える。丁寧な話し方や、落ち着いた態度。先程の件があつたためか不用意な事を言わないようにと、少ない言葉で返してくる思慮深い雰囲気、逆に自分の方が落ち着かなくなってしまう。

「その、目的というのは聞いても？」

「ごめんね、それは個人的な事だから」

「そうですか……」

そう答えると少女は押し黙ってしまった。けれどその理由を話す事はできない。アルツァイスト国への復讐。その悲願の為に私は冒険者をやっている。

冒険者にはランクがあり、A〜F、更にAより上のSランクが存在する。

私の目的はSランク、最低でもAランクになる事。何故なら上位ランクともなれば各国から注目され、志願すれば平民でも騎士になる事が夢ではなくなるのだ。そしてアルツァイストの騎士になれば内部から王を暗殺する事もできるだろうと考えている。そしてもう一つの目的であるルト王国の再建だが、正直な所こちらはほぼ諦めている。いくら王女として王族の血をひいていても、私一人のできる事は限られているから。それよりも優先すべき事は、あの若きアルツァイスト王に無念に散った者たちの想いを思い知らせる事。

一度だけ会った事があるあの若き王、カイル「アルツァイスト」ユーゲンデッド。王城のパーティーで会った時は温和な雰囲気、虫も殺さないような笑顔を浮かべていた。とてもこんな大それた戦争をするような人間には見えなかったけど。

だけどそれこそが彼の策だったのだろう。そうして油断させた上で彼は同盟の協定を一方的に破棄、隠していた牙で襲い掛かってきたのだ。

脳裏に浮かぶのは無念にも死んで行く者達の声。燃えさかる城内で逃げ惑う者達。家族を想いながら死地へ向かう騎士達。

そして、最後まで国と共にあるといったミリアリアの苦痛にゆがんだ表情。

私は……彼らの無念に答えねばならない……

あの時の事を思うと心闇に吞まれていくのが分かる。
決して許していけない、決して忘れてはならない。
必ず、必ずあの若き王に鉄槌を下すのだ。

殺せ

ころせ

コロセ

コロセ

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ

脳内に響く無数の声。

死んだ者達の……恨みの声

——そしてそれは……愛していた民の声

待っていて……私が……いつか必ず……

「……ファさん、レンファさん」

「あ、え？」

「どうしましたか？　なんだか怖い顔してましたけど？」

「あ、ごめんね。なんでもないから」

（いけない、悪い癖ね）

あの時の事を思うと周囲が見えなくなってしまう。
今は目の前の少女に集中しなければ。

「ごめんね、何の話だった？」

「レンファさんの好きな服の話です」

「あ、あれ？　そんな話してたっけ？」

「はい、してましたよ。ええしてましたとも。それでレンファさんの好きな服は？　ああちなみに私のおすすめはスクール水着です、どうでしょう？　いいですよ、きつと似合いますよ、西洋系美人があえて着るスクール水着、なんというこつ、背徳感……とでも言いますか。たまりませんよね？」

「ええと、まずその、すくうるみずぎ？　っていうのは何のか分からないんだけど……よね？　とか言われてもその……」

あ、あれ？ さっきまでの大人びた雰囲気は影も形も無くなってしまった。

異世界の話をしていた時以上の痛い感じがしてくるのは気のせいだろうか？

しかし話をしている時の輝いた瞳、そして本当に楽しそうな可愛い少女の笑顔は、さっきまでの思慮深い雰囲気とは違って変わり、年相応の愛くるしいものになっている。

こんな少女の姿を見てしまうと無下に会話を打ち切るのは心苦しい気分になってくる。

「ええと、私の事より、あ、貴方の好きな服はどういったものなの？」

「私ですか？ いえいえ私の事はいいんですよ、今はレンファさんの服の方が重要なんですよ」

「わ、わたしはその。冒険者だから動きやすければいいかな。その服とかあんまり気にしないし」

本当は嘘だ、私だって年頃の女の子だし、本音を言えば少女の着るような可愛い服だって着てみたい。

けれど、今の私にはそんな余裕は無い。心も……お金も……

そんな服を買う余裕があったら、食費や剣などの冒険に必要な物を買おうにしていた。

今着ている服もいつ買ったのか覚えてないくらい……だから尚更臭うのだろうけど……

（うーん、もしかしてあんまり臭うから服買った方がいい、って事を言いたいのかなあ……）

とはいえ、今は食費にすら困窮しているのだ。

服にかける余裕は無い。

「でも、でもですよ。やっぱり綺麗な服着たいと思うんじゃないんですか？」

少女は今もお食いついてくる。

両手をばたばたと振り、いかに服が大切なのか必死にアピールしている。

……やっぱり服が臭うのかな……

「えーと、ごめんね？ そのー、お金があんまり無いから、考える余裕が無いっていうか、ね？」

「……………そうですか」

「そ、そうなの」

さっきまでの興奮した表情が一気に冷めていくのを見て、なんだか申し訳ない気分になってくる。

「ならお金さえあれば考えてくれるんですね！」

「えっ!？」

突然の少女の言葉に啞然とする。

この少女は一体何を考えているのか、何をしたいのかよく分からなくなってきたのだ。

初めは上級貴族の想像の激しい痛い子だと思っていた。だからこそ安全な場所まで送り届けようと思っていた。

しかし、会話をしている時の節々に見せる思慮深い発言や大人びた雰囲気。そういった所からただの痛い子には見えなくなってきたのだ。

そしてやたらと食いついてくる服の話。

——本当に臭いが気になるだけなのだろうか？

臭いだけならただ安い服を買えばいいだけの話。わざわざ好みなんて考える必要は無い。

にも関わらず、少女はまるで私に綺麗な服、好きな服を着せたいみたいに見える。

その行動は一体何なのか？ 少女の思考が全く見えない。

（そういえば、自分の事を異世界から来たっていう設定みただったけど、ここに来た目的なんかはあるのかしら）

「ねえ、」

「あ、村ってあれじゃないですか？」

少女に問いかけようとしたその時、木々の向こうには目的地である小さな村が見えた。

（まあ、ここでお別れだし。詳しい話は聞く必要もないかな）

久しぶりの他愛の無い会話。

裏表を感じさせない可愛らしい少女との会話。

そこにひと時の安らぎを感じた、感じてしまった……

私はそれを楽しいと感じてはいけない…… 享受してはいけない……
……一緒に居たいと考えてはならない。

——私は独りでいると決めたのだから…… また…… 淋しい思いをし
たくないから。

8話 レンファの想い（後書き）

カナデはシリアスな空気をぶち壊す能力を持っています（笑）

9話 カナデの想い

レンファさんは自分の事を強いと言いましたが、恐らく見栄を張ったのでしょう。

見た目からしてどこをどう見ても強そうには見えません。

ボロボロの服もそうですが、腰に差しているしよばいショートソー
ドも問題です。

何の飾りも無い簡素な剣は、いかにも安物！ って感じがして、強
者が持つ物とは思えません。

しかしかといってここでそこを指摘して怒らせるのは私に何のメリ
ットもありません。

ここは大人しく納得したフリをするのが得策でしょう。

それよりも今はいかにこの残美さんを綺麗にするかです。

こんなボロボロで悪臭漂わす残美さんをいかに美しく変身させるの
か、それが難問です。

ただ単純に綺麗な服を着せて、はい、綺麗になりました！ でいい
のでしょうか？

いえいえ、そんな訳がありません。

美しさとは内面から滲み出るものです。

いかに外面を上手く誤魔化しても、内面から滲み出る残美オーラが
それを台無しにする事間違い無しです。

そもそもなんでこの人はこんな格好をしてまで落ちぶれた冒険者を
やっているのでしょうか？

もつと上手くその美貌を活かせば他にやりようがあるでしょうに。

大体親は何をやっているのですか！

いくら成人するとはいえこんな可愛い娘さんをみすばらしい冒険
者にするなんて！

「いえ、レンファさんほど綺麗な方なら、他にも道はありそうですし、どうしてもわざわざ大変そうな冒険者に？ 親は反対されなかったのですか？」

という訳で率直に聞いてみました。

そしてその返答は予想外のものでした……

親がない…… そうでした、そういう可能性もありましたね……

そう思うと日本はやはり平和だったんでしょう。私の周りにも親が死んだ人はいましたがその人は親戚に引き取られていて、そこまで不自由しない生活をしていました。

しかし、この世界では違うのでしょうか。まだこの世界は森しか見ていませんが、残美さんの服装や冒険者という職業から見て地球ほど発展した世界では無いように思えます。

食べる物すら困る世界。

ただ生きる為に必死にならなければいけない世界。

それは平和な日本で過ごした私からは想像もできないのでしょうかね。

——レンファさんのいう目的が何かは分かりませんが、私はこの世界の事を少し甘くみていたのかもしれませんが。

ボロボロな服を着て悪臭を撒き散らす彼女。

それでも目的があるから冒険者を続けているという。

ならばその姿は彼女が必死に生きてきた証。

衣食住を保障されていた生活。

親という守護者に守られて、それを幸せとも思わない生活。

ただ退屈に、適当な恋をして、目的も無く、毎日を無為に過ごして

いた自分。

私は何をしていたのだろう。

くだらない生活をしていたのではないだろうか？

（はあ、色々考えさせられますね）

それでも今はやるべき事ができた。

彼女を綺麗にする事。

それは無理やり精霊、ナイちゃんに頼まれた事でもあるけど……何もしないよりはきつといい。

目的を持ってそれを果たせた時、私も何か変わるかもしれない。

（……やってみますか！）

それによって何かが変わるかもしれないし、何も変わらないかもしれない。

けれど目の前には可能性がある。

それならちよつとやってみましょうか。

——ただ世界に戻るためだけではなく、ただ頼まれただけではなく、自分の意思で彼女を綺麗にしてみましようか。

そして彼女と話を続けていたら、村が見えてきました。

途中、うっかり張り切りすぎて会話が暴走してしまったのはご愛嬌

ですね。

気を取り直して行きましょう。

さあ、物語はここからです。

持ち物無し、お金無し、常識無し。
横には生活力無しのレンファさん。

お互いお金が無くて余計な事なんて考えられない状況。
今は生きるだけで精一杯。

もしかしたらそれすらも難しいかもしれません。
余裕なんてゼロ。

まさにゼロからみたいなスタート地点。
こんな状況を引っくり返して、私は彼女を誰もが見惚れるスーパー
レディに仕立て上げる。

客観的には絶望的に見えるかもしれませんが。

けれど私にも今まで生きてきた経験があります。

それはちっぽけなものかもしれないけど、まるっきりゼロじゃありません。

だから絶望するのは早すぎる。

まだ私は何もこの世界を見ていない。

目の前に見えるのは小さな村。

都会で生きてきた私には信じられない場所。

この新しい場所で、新しい世界で、私も必死に生きていきます。

——さあ、残念な美人さん、レンファさんと一緒に頑張ってみましょうか！

10話 壊れた世界

目の前に見えてきた村はリンネ村と言うそうです。

100名ぐらいが住む小さな村。

周囲の森が人を遠ざけるので外部との関わりが少ない村らしいのですが、特におかしな宗教であったり謎の風習があったりとかはせず、いたって普通の平和な村だそうです。

ちなみにこの世界にも宗教はあるらしいです。なんでも世界を創り、精霊を創り、そして人や動物を創った神様。創造神アリファルス様というのを信仰していて、各地に神創しんそうと呼ばれる教会みたいな建物があるらしいですが、よく分からないのでスルーしました。だって関わる事はなさそうですし。

それよりも個人的には家の造りが木造だった事がショックです。個人的にファンタジー世界というと中世ヨーロッパみたいな感じの石造りの家を想像してたのですが、どうやら石造りなんてのは城とか、後は大きな街だけでしか見られないそうです。ちよつと残念ですね。こういった小さな村はみんな今も木材の家で藁葺わらぶき屋根。なんだかどこかの秘境の部族って感じですね。

（雨とか大変そうだなあ……）

「さて、とりあえず休める所を探そうか」

「そうですね、とはいってもお金無いんですよ？ どうしましよ
うか？」

「……一応考えはあるけど」

「……なんでちよつと不安そうな顔で言うんですか？」

「多分大丈夫だろうとは思う。ただ念の為に貴方の力を借りたい」

「私の力ですか？ 別に特殊な事なんてできませんよ……ああ、裁

縫ならできますけど？ それとも胸を触らせたら右に出る者はいないと言われた神指しんしの力ですか？」

「……………違う、特に後半は何？ 紳士って男性を指す言葉なんじゃないの？……………」

「ふふふ、紳士ではなく神指です。そして内容は秘密です。いずれ分かりますよ」

（ああ、「お前は変態神指だな！」と呼ばれていた頃が懐かしいです……）

ちなみにその言葉を発した友人である女の子は、冗談みたいな言葉とは裏腹に、衣類は乱れ、頬を真っ赤に染めていました。

涙目で荒い息をして地面にへたり込んでいる彼女、思わず最後まで……………？ なんて考えたりもしってしまった中学三年の夏の思い出です

（あ、ちなみに私はノーマルですよ？）

そんな郷愁を感じていたら、村の広場から騒がしい声が聞こえてきました。

大勢の人が集まっているようですが、なんだか険悪な空気です。遠巻きに様子を見てみると、

「さつさと金と食い物出せつつってんだよ！ こいつがどうなってもいいのかつ！」

髭ボウボウの髪ぐしゃぐしゃ。今までお風呂とか入った事ないんじゃないかなと思われるぐらい汚らしい格好。その粗野な態度からして見るからに乱暴者といったおっさんが三人いました。その内の一人の手には斧……………それとまだ十歳ぐらいと思われる小さな女の子を持っていました。

（どうみても強盗です、はい）

男は人質にしている女の子の首に左手をまわして抱き上げています。その手には相当力が入っているのでしょう、女の子の顔は苦痛に満ちていて痛々しいです。というか首だけで全体重を支えているので窒息死してしまうのではないかと思っています。

（はぁ……こんなファンタジーじゃないのに……）

現実の残酷さともいいましょうか。折角異世界に飛ばされたのですから、もっとこう王子様とかに出会って禁断の恋とかなんかこうそういうのに若干の期待を持っていたんですけど……実際はそんな甘くないですね。

この状況を見て、物語にあるような異世界の勇者なんかは助けに行くでしょう。しかし私は一般人です。事なかれ主義の日本人です。あの女の子は可哀想ですけど私にまでとばっちりがきたら大変です。同情しつつもここは遠くから様子見させて頂きましょう。

だってなんだか目の前に起きている事なのにどこか現実とは感じられないんですよ。あまりにも今まで生きてきた世界と違いすぎる状況に脳が追いついていないのでしょう。テレビで見る外国で起きた事件みたいな、現実感の無い遠い遠い国での出来事に見えてきます。

「ちょっとここで待っててね」

とかそんな事を考えていましたが、隣の残美さんは違ったようです。勇者です。ここに勇者がいましたよ。ただそれが残美さんだという事が不安で仕方ありません。

「何をする気ですか？ まさか助けに行くとかいいませんか？」

「えっと、その、まさかなんだけど」

「だ、駄目ですよ！ 危ないです！！ もし怪我とかしたらどうするんですか！」

たたたたいへんですよ！ もし顔に傷なんかついたりして、それが一生物だったりしたら大惨事ですよ！ 折角の美人さんが台無しですよ。唯一の長所（推定）が無くなっちゃいますよ！

「それにもし逆に捕まっちゃたりしたらどうするんですか！ 怪我とかじゃすまないんですよ」

だって野蛮そうな男達が残美さんに群がる様子が容易に想像できちゃうんですよ。どこからどう見ても弱そうな残美さん。さくつと負けてそこから18禁突入です。みたいなの！？
さっきまでと違ってなんでこんな事だけ想像が簡単にできるのかは我ながら不思議で仕方がありませんが……

「大丈夫、ほらさっきも言ったけど、私こう見えて強いから」

ダウト！ 絶対嘘です。それにあんな荒くれ者、しかも三人相手に勝てるわけがありません。

「駄目です！……どうしても行くというのでしたら……私を倒してから行きなさい！」

そう言い、私は両手を広げて残美さんの行くてを遮ります。
なんだかテンションがおかしくなってきました。ちょっと楽しいです……はい、不謹慎ですね。

「ええつと？」

残美さんが戸惑っています。それはそうでしょう。正直言った私も意味が分かりません。けどもう止まらないんですよ。私の熱いパッションが！

「さっさと出せつつつてんだよ！ ああん？ なんなら腕の一本でも切り落としてやろうか！」

そんな馬鹿な事やってたら、不穏な言葉が聞こえてきましたよ……あ、あれ、ちよつとまずい空気ですよこれ。

思わず残美さんから目を離して強盗の方に目をやると、私の脇をすり抜けて残美さんが飛び出して行きました。

その予想を遥かに上回る身体能力に唖然とします。なんていうかこう、シュって感じですよ。シュって感じ。

「ぐああああ！」

そんな風に私が呆けていたら、いつの間にやら残美さんは女の子を救出していました。

地面には女の子を捕まえていた野蛮な男の左腕……左腕は肩の根元から切られ、血が噴水のように湧き出ていて地面を真っ赤に染めています。

戦っている残美さんは、さっきまでとはうって変わった真剣な顔をしていました。

傍にいた男が力まかせに振り下ろされる斧をまるで柳のように軽やかに横へかわし、無防備になった胸元へ斬りつける。

その一連の動きはとても洗練されていて、今更ながら自分で強いと言っていた事が本当だったんだと思いました。

けれどそれ以上に私は……目の前の現実には眩暈がしました。

空には鮮血が舞っています。

血なまぐさい鉄の臭いがします。

痛みで絶叫する男達の声が聞こえます。

声、臭い、血の色。それらが私に訴えかけてきます。

——ここは平和な日本じゃない

——ここは平和な世界じゃない

——ここは簡単に人が殺しあう異世界なんだ

頭ではなんとなく理解しているつもりでした。

残美さんの帯剣姿や、冒険者という職業。

精霊さんがいて、魔法があるなんて物語でよく聞くファンタジーの世界。

けれど私は本当の意味では理解しきれていなかったのでしょうか。人が斬られるという事。

剣という人を斬る為に生まれた凶器。

そんな凶器が存在する意味。

誰もが凶器を持てる世界。

勿論地球にも凶器は沢山ある。

けれどそれは平和な日本に住む私にとって身近なものではありませんでした。

——ここは死が身近にある世界

私はここに来てようやく理解したんだと思います。

自分がどこにいるのか。

自分がどれほど危険な場所に來たのか。

今更ながら分かったのです。

戦いを終えた残美さんは私を見ていました。

もう大丈夫だと、安心させるような優しい笑顔で。

しかしその姿は返り血を浴びて真っ赤でした。

けれどその姿に違和感はありませんでした。

それは彼女にとってこれが日常なんだと言っているようで、

私は……………

「いやああああ！！！」

私はその意味を理解した時…………喉から叫び声が出るのを止められませんでした。

今までのどこか御伽噺のようだった世界は一瞬で壊れ、ここが現実、これが今の私の現実だという事を思い知らされて…………その恐怖に耐え切れずに私の意識は切れていったのです。

10話 壊れた世界（後書き）

あ、あれ？ 気がつくと何故かシリアス路線に走りたくなる作者です。

11話 目覚めて、それから

「ここは？」

気がつくと私は床に寝かされていました。いえ、床というのは少し失礼かもしれませんが。木材の床に簡素な布が敷かれています。きつとこれがこの世界の、少なくともこの村での寝床なのでしょう。ほとんど床に寝かされているのと同じ感じがして背中がとても痛いだけです。

「気がつきましたか？」

寝たままの私に柔らかい笑顔を向けてきたのは、レンファさん……ではなく知らない女性でした。

私が首を傾げていると、その女性は私の疑問に気づいたのか、言葉を続ける。

「私はシズネと言います。貴方はカナデさんですね？」

「そうですけど……なんで私の名前を？」

現状が理解できない私の姿がおかしいのか、クスクスと可愛らしい小さな声で笑う女性。とはいってもそれは馬鹿にしたような笑いではなく、微笑ましい笑いだった。シズネさんと名乗ったこの女性は、大人っぽい落ち着いた雰囲気身をまとった、目鼻のパツチリとした金髪美女って感じの人。年齢は20代後半ぐらい？ 外人さんの年齢は分かりにくいけど、それぐらいじゃないかなあと思う。

「私は、えーと？ ああ」

状況がよく分からないけれど、寝たままというのも失礼な話なので、とりあえず体を起こす。落ち着いて辺りを見渡せば、やはりここはこの世界の家のようです。外から見たときは今にも倒れそうな簡素な建物に見えましたが、内側から見ると……やっぱり壊れそうで、ちよつと不安です。

「気分はどう、落ち着いた？」

そんな失礼な事を考えている私に先ほどと変わらず優しい微笑みを向けてくる女性。シズネさんといいましたか、よく見ると顔が少し土で汚れています。まあこういう村で生活するって大変なんでしょう。化粧なんてする事もなさそうですし、そもそもこの世界に化粧なんてあるのかな？

「大丈夫？ どこか痛む所とかある？」

「あ、いえいえ。大丈夫です元気です」

再び失礼な考えをしていた私でしたが、色々と思い出してきました。私は血を見てショックで倒れたんです。正直、今もあの光景を思い出すと恐怖で体が震えます。飛び散る血や、胸や首を切られて悲鳴をあげる男たちの無残な姿……それは初めて死というものを意識した瞬間で、今もまぶたの裏側に焼きついて離れません。と、そこまで思い出した所で、大事な事が頭によぎる。

「あの、レンファさんは？」

「……………」

「あのー？」

何故か、口を閉ざす彼女。ちよつと嫌な予感がするけれど、それでも聞かないわけにはいかないし、もしかしたら名前だけじゃわか

らなかったのかもしれないので、もう一度尋ねてみる。

「えっと、レンファさんっていうのは、一緒にこの村に来た人なんですけど。外見はちょっと残念な美人さんで、あ、さっき暴漢達を退治した人って言ったほうがわかるかな」

「はい、レンファさんには助けていただきました」

よかった、どうやら通じていたようです。

「昨日、村を出て行きました」

「……………は？」

私は異世界に来て耳がおかしくなってしまったようです。

12話 現状把握

「えーと、聞きたい事が2つあるんですけど、いいですか？」
「はい」

こういう時は、焦らずに現状を把握する。子供の頃によく慌てて失敗していたから学習した事。

「まず1つ目が、昨日っていうのは？」
「カナデさんが気を失ったのは昨日の事なんですよ」
「っていう事は、私は丸1日眠っていたの？」
「はい」

成る程、身体が痛いのは床のせいだけじゃなくて、眠りすぎが原因なわけと。まあ正直そっちはどうでもよくて、それより本題はこれから。

「それで2つ目、レンファさんが出て行ったっていうのは？」
「昨日、カナデさんが気を失った後、レンファさんは先を急ぐからと出て行ってしまいました。私たちもお礼したく引き止めたのですが……カナデさんの事をよろしくと言い残して……行ってしまうました」
「そう……ですか……」

そう言うのが精一杯で、思わず眩暈がしてきました。折角レンファさんと一緒に頑張ろうって思った矢先にこれですか。確かにレンファさんと一緒にいるっていうのは私の事情ですけど……それにしても黙って行くな……

「ごめんなさい……私たちもせめてカナデさんが起きるまでと言ったんですけど、その、すごく気にしていたようで……」

「気にしていた？」

「はい、レンファさんは私が怖がらせた。このまま一緒にいても怖がらせるだけだから……」

「え？」

思わず聞き返してしまった。怖がらせたって、あれ？　じゃあレンファさんが出て行ったのって私のせい？　私が気を失ったから？　私が悲鳴をあげたから？　私が……脅えたから？

「レンファさんからは、私の代わりにカナデさんをよろしくと言われてます。汚い家で申し訳ないですけど、暫くここで休んでいって下さい」

シズネさんが何か言っているけれど、混乱した私の耳には届いて来なかった。レンファさんが出て行くと聞いた時よりも、私の頭はずっと混乱していた。私の行動がレンファさんを傷つけた……そう思うとなんともやるせない気持ちになっていく。思えば私は勝手にレンファさんについていった。レンファさんの都合も考えずに。そして、レンファさんは何も悪い事、ううん、むしろ正しいことをしたのに……私はそんなあの人を傷つけたんだ。

——謝りたい。会って、謝らないと！

そう思ったらいてもいられなくなってきた。私は喰ってかかるように、縋りつくように、シズネさんに言葉をぶつける。

「あの！　レンファさんがどこいったのかわかりますか！？　わたし謝らないと、会って、それで、それから、わたし」

「ちょ、ちょっと待って！　お願い、落ち着いて」
「あ、ご、ごめんなさい」

ああ、やってしまった。子供のころからそう。私は感情が爆発すると冷静でいられなくなってしまう。それでいつも失敗してきた。普段は冷静でいようとするんだけど……

「お姉ちゃん、どうしたの？」

と、そこへ騒ぎを聞きつけたのか、玄関と思われる扉から女の子が1人入ってきた。

「あ、目が覚めたんだね」

「ええっと？」

「アイ、挨拶しなさい」

「はい。初めまして、アイリって言います」

そう言つて、可愛らしい笑顔と一緒にお辞儀してくる少女。

「あ！　あの捕まってた」

「はい！　レンファお姉ちゃんに助けてもらいました」

「アイは私の妹なんです」

「は、そうなんですか。初めまして、私はカナデ。カナデユウナギです」

そういえばシズネさんにもちゃんと挨拶してなかったと思い、改めて2人に挨拶する。レンファさんとの会話で、こちらは家名が先と知っていたのでこちら流で名乗る。

でもそっか、それで“恩人”であるレンファさんのお願いで、私の面倒をシズネさんが見てくれてたんだ。

「ねえねえ、カナデちゃん」

「……なに？」

そんな風に現状を理解していると、アイリちゃんが話しかけてくる。その口ぶりから、主に“ちゃん”付け辺りからとても嫌な予感がしたけれど、話の先を促す。

「カナデちゃんって、いくつ？ わたしと同じくらい？」

「……アイリちゃんはいくつなの？」

嫌な予感が的中です。恐らくアイリちゃんは10歳前後でしょう。そんな娘に同じくらいって聞かれるなんて……いやいや待って、まだそう考えるのは早計といったものでしょう。ひよっとするとこっちの人も私みたいに発育が遅いのかも

「わたし？ わたしはねえ、この前8歳になったの！」

「………そう」

「えへへ」

そう嬉しそうに答える少女。ああそうですか、逆に発育はいいようですね。見た目130cmぐらいの少女。ぶつちやけると私より少し低いぐらいですか……そんな少女が8歳……ふふっ……どうせ私なんて発育不全のできそこないですよ……

そう黄昏ていると、シズネさんまでもが驚愕の言葉を続けてくる

「私は今年16になるんですよ」

「………は？」

「私は来月16歳になるんです。カナデさんはお幾つなんですか？」

「わたしより少し年上？ 10歳ぐらい？」

ああ、ここは異世界ですからね。きっと身体の成長も違うんですよ。ええ、そうに違いありません。そう思う事にしましたよ。はい

「そ、それよりごめんなさい。えっと、レンファさんなんですけど、どこへ向かったかわかりますか？」

とはいったものの、なんだか素直に年齢を言うのは負けた気がするので、話を変える事にしました。というよりそんな年齢なんて気にしている場合じゃないんですよ！ 大事なのはレンファさんの事なんです！ ええ、決して現実から目を逸らしたわけじゃないですよ？

「レンファさんならリクレイトに向かいました」

「リクレイト？」

「あれ、知らないの？ すっごい大きな街なんだよ」

「そこへはここからどういったら行けますか？」

「ここから南へって、まさか追いかけるつもりなの？」

「はい」

そう、追いかけなくちゃ。会って、謝らなくちゃ。私はそんなできた人間じゃないけど、それでも誰かを傷つけて、そのままになんてできない。

「ここから南の森を抜けた場所にあるんだけど、普通に歩いて10日ぐらいかかるわよ？」

その言葉に頬が引きつる……どうやら目的地は予想以上に困難な道のりのようです。10日って……昔と違って普段あまり歩かなくなった現代人に10日の道のりって相当なものですよ。それになに

より野宿しなきゃいけないじゃない！ 食べ物もどうすればいいの！？ お風呂！ お風呂は！？

「だからね、大人しく迎えが来るのを待ちましょう、ね？」

私の絶望が伝わったのか、そう優しい笑顔で接してくるシズネさん。ってあれ？ 迎えて何の話でしょう？

「レンファさんから聞いていたけれど、カナデさんは本当に貴族らしくないわね。私達からすればそれは接しやすくって嬉しいけれど、これ以上危険な事したらご両親に怒られるわよ。きつとご両親も心配して探しているわ。レンファさんに会いに行くのはそれからでも遅くはないでしょう」

…… 本当に私の耳は異世界に来ておかしくなってしまったようです。いつから私は貴族の子になったのでしょうか……。

13話 月明かりの下で

「いやああああ!!!!」

目の前には少女の恐怖に歪んだ顔があった。その目線は私を捉えて離さない。ほんのついさっきまで楽しそうに笑っていた少女、しかし今は私を見て怯えていた。さっきまでとはうってかわったその態度を見て私は自分の姿を見下ろす。返り血に塗れた姿は確かに見えて見苦しいものがあるけど、それしか感じなかった。私は今さっき3人の男を殺した。けれどそれに対して私は何も感じなかった。しかし少女は違ったようだ。私を、人を殺した私を見て怯えている。何も感じない私の心が麻痺しているのか……少女が生きてきた世界が優しかったのか。それともその両方か。一つだけ言えるのは――私はもう少女の生きる世界では生きられないという事。優しい世界で生きるには、私はもう血で汚れすぎている。

改めて、私は城にいた頃の自分と変わった事を思い知った。少女は昔の私なんだ。人を殺す事を知らない、人が死ぬ姿を知らない。傷つく事、傷つけられる事の無い、優しい世界に守られていた私と……同じ。

目の前の少女がゆっくりと倒れていく。私は手を差し伸べる事もできない。穢れた私の手で触ってはいけない。少女はこのまま優しい世界に戻るべきなのだ。私のような堕ちた人間に関わってはいけない。けれど、それでも、私は……自然と叫んでいた。無意識に、ただ少女の名前を叫んでいた。

「カナデっ!」

そこで私は目を覚ました。

「夢……？」

厳密には夢じゃない、実際に起きて、感じた事。私がいかに変わってしまったのか、知らされた現実の出来事。

「重症ね……」

今はもう村を出て、森の中で野宿をしていた。静かな夜の森に、ひっそりと青い月の光だけが周囲を照らしている。

この辺りは大型の魔獣は出ないため、常に身に着けている簡易の魔除けだけで安全に眠れる事ができる。もっと危険な地域の場合は、結界を張る必要があるが、それには聖石せいせきと呼ばれる高価な石が必要で、しかも消耗品なのでおいそれと使用する事はできない。

危険が少ない場所、そのため周囲に気を張る必要は無い。しかし、だからこそ、余計な事を考えてしまう。

「……静かね」

なんの気なしにポツリと呟いた言葉、それは森の中へと消えていった。ほんの半日前なら、横には少女がいて、こんな気持ちになる事はなかった。けれど、これ以上少女と一緒にいる事には耐えられなかった。昔の自分と比べられるようで……今の惨めな自分を思い知らされるようで……私は逃げ出してしまった。

「大丈夫かな」

思い返すのは気を失った少女の事。置いてきてしまった自分が心配するのも変な話だけれど、少女の方もこれ以上私の傍にいるのは耐えられなかったと思う。だからこれでいいんだ、と、そう自分に言い聞かせる——何度も何度も自分に言い聞かせる。そして、今度

こそいい夢を見られるようにと目蓋を閉じた。

（忘れなきゃ……）

そう、忘れなきゃいけない。少女、カナデとはもう会う事は無い。私の堕ちた人生に関わる事はない人種。関わらせてはいけない人種。優しい世界の住人。

（忘れなきゃ……）

何度も、何度もそう言い聞かせる。けれどそう思うたび、強く思い出してしまう。僅か数時間だけ一緒にいた少女。しかしその数時間で充分だった。彼女のずっと塞いでいた、閉じ込めていた気持ちを思い出させるには、充分過ぎる時間だった。

城を出て3年。最初の1年はただ生きるのに必死だった。2年目になって冒険者にも慣れてきた頃、ランクが上がれば騎士に任命される可能性があるを知って、がむしゃらに依頼をこなしてきた。わき目も振らず、ろくに睡眠もとらず、ただひたすらにランクを上げてきた。そのお陰か、通常なら早くても5年はかかるといわれたランクCまで1年とちょっとで辿りついた。けれど3年目になってそれも止まってしまった。高ランクになると、こなせる依頼も少なくなってきたため、ランクを上げる事ができず、現状維持が続いていた。

そんな停滞している現状に嫌気が差してきた時に出会ったのがカナデだった。

この3年間、ずっと一人で、孤独に走り続けてきた。そんな時に現れた少女は、彼女の奥底に眠らせていた心を簡単に思い出させてしまった。恐らく少女からすれば、他愛のない会話だっただろう。別段面白い、身のある話をしたわけでもない。けれど3年間、ずっと一人でいた彼女からすれば、それは久しぶりに感じる触れ合いだった。

た。

(……………)

閉じた目蓋から一筋の涙が流れる。彼女は気づいてしまった。この感情に。少女と一緒にいた事で、何の下心も感じない、純粋な少女と接した事で、思い出してしまった。

——さみしいという気持ちに。

城にいた頃も、淋しいと思う事はあった。母も父も、国の政務が忙しくて、なかなか会えず、小さい頃はよく泣いていた。けれどそんな時も、傍にはミリアリア、ほかにも侍女達がいてくれて、淋しさを紛らわしてくれた……けれど、今は1人。

(……………さみしい)

思い出してしまったら、後はもう止まらなかった。ずっと閉じ込めてきた感情はもう抑える事はできない。3年間抑えてきた感情は、徐々に大きくなっていく。

(1人は……………さみしいよ)

誰か傍にいてほしかった。隣にいてほしかった……一緒にいてほしかった……1人は嫌だった。

(……………カナデ)

思い浮かんだのは、少女の事。この気持ちを思いだす原因となった少女……そしてもう……会うことのない少女。

（さみしいよ…………カナデ）

もう城にいた人たちと会う事はできない。私の家族は友人はみんな失ってしまった。けれど、あの少女は生きている。唯一、また会える可能性を持っている。

（会いたいよ…………）

それは叶わぬ望みだと知りながら、彼女はゆつくりと眠りについた。その目蓋の裏側に涙を溜めながら、それでもこれ以上泣くまいと、気丈にも耐えながら…………眠りについていった。

14話 ナイちゃんの力

「どうしてっ……こんなっ！」

カナデは必死に森の中を走っていた。鬱蒼と生い茂る森の中は走るには不向きで、何度も転びそうになるのを堪えながら走り続けていた。幸いまだ日中という事もあったため、視界は明るく、まだ転ぶという最悪な事態はまぬけていたが、それも時間の問題なのかもしれない。何よりも、カナデの焦りが動きを鈍らせていた。ただ走っているだけなら、まだ平気だったのかもしれない。

しかし、カナデは焦っていた。いや、不安だったというべきか。異世界に来て感じた恐怖という感情。これまで元の世界で平和に生きてきたカナデにとって、それは強いストレスであり、思考、動きを妨げるのに十分なものであった。そしてその恐怖の元はすぐ背後にまで来ていた。

そんな状況で速く走れるわけもなく、それがまたカナデの不安を大きくさせていった。

「助けてっ！ 誰か助けてよっ！！」

しかし、その悲痛に満ちた叫び声は誰に聞かれる事もなく、虚空に消えていった。

「いやいや、私は貴族とかじゃありませんからっ！」

はあ、まさか私が貴族だと思われていたなんて……さつきから何度も説明しているのに、シズネさんに上手く伝わっている様子は無い。なんというか、生暖かい目で、「大丈夫、分かっているわよ」といった視線をしていた。

まるで子供を相手にしているみたい、とそこまで考えて思い出す。彼女達は、私を子供だと思ってる。本当は私の方が年上なんだよね……もういつその事、私の年齢言ってしまうのか、でも信じてもらえなかったら……きつとへこむ。マジでへこむ。むしろ泣いちゃうよ。それになんかこう負けた気になる……主に体型的な部分で。と、なんだか自分で考えていて泣きそうになっていたら、アイリちゃんが扉の方へ歩いていった。

「はい！」

可愛らしい返事をして元気よくとことと歩いていく姿は微笑ましく、またそんな少女と同じくらいに見られている自分はどれだけ童顔なんだろう、と虚しくなってくる。

そんな相反する感情に揺さぶられていたら、部屋の中に数人の男性が入ってきた。その中心にはなんかこうすっごい威厳あります！って感じの険しい顔をしたお爺さん。その脇を固めるのはごつい青年が二人。どう見てもこの村の権力者プラス付き人って感じの集団です。その視線の先は……私？

「この娘か？」

お爺さんは視線を私に向けたまま、シズネさんに問いかけた。その少し険のある口調に嫌な予感を覚える。

（ナイちゃん、ナイちゃん）

（なに？ なに？）

（このお爺さんの心読める？）

そう、レンファさんの言った事が本当なら、精霊は人の心が読めるらしい。その事を思い出すと同時にレンファさんの事まで思い出した私の胸はちくりと痛んだ、けれどあえて無視をする。今はレンファさんの事を考えている場合じゃない。この世界は私のいた世界とは違う。最初の頃の浮かれた気分を引き締めて、ゆっくりと深呼吸する。

この世界には私を守ってくれる存在はいない、私は自分で自分の身を守らないといけない。ここには親も友人も警察もいない。自分の身は自分で守らないと。

私は運動神経は悪くはない。むしろいい方だという自信はある。けれど、それはあくまでも元の世界での事。この世界ではどうか分からない。私は力が無いし、体力もそれほどない。あのレンファさんの戦いを見た後だと、なおさらそう思う。私は力の無いただの一般人なんだ。そんな私がこの世界で上手くやっていくには、ナイちゃんの力を借りるしかない。

（……やな気持ち）

（や、やな気持ち？）

えーと、ひつじょーに抽象的だね！……うん、普通のナイちゃんという言葉使いで気づくべきだね。ナイちゃんが急に人の心を細かく流暢に言えたらびつくりだよ！　ちよつと、ちよつとだけ……ナイちゃんの力が……残念だよ……

（ま、まあ、ないものねだりしても仕方ないよね）

（カナデ？　カナデ？　どうした？　落ち込んでる？）

（あ、ううん。大丈夫だよー）

ナイちゃんと会話をしていたら、いつの間にかお爺さんはシズネさんの方を向き、話しかけていた。

「シズネ、話がある。外に出なさい」

「ここでしたらいいのではないのですか？」

「……外に出なさい」

「……はい」

シズネさんもお爺さんの様子をおかしく思ったのか、表情は困惑に満ちていたけれど、渋々と従って行った。横にいた、二人の男性もついて外へ行ってしまった。残されたのは、私とアイリちゃんの二人。

（あれっ！？ 挨拶も無いの！）

ふつつ初対面なら名乗るよね。思いっきり視線をぶつけてきたのに、無視したように名乗りもしない態度はどうなんだろう。まあ、この世界にはこの世界の常識があると思い、シズネさんが帰ってくるのを静かに待っていた。

——この時、もっとナイちゃんと話をしていたらあんな事にはならなかったかもしれないのに……

15話 それは突然の出来事（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

皆様今年も相変わらずのスローペースですが、何卒よろしく願い
いたします。

15話 それは突然の出来事

シズネさんは外へ行ってしまい、家の中は私とアイリちゃんの2人つきり。

何か嫌な予感があったカナデは盗み聞きでもしようかと一瞬考えるが、それがばれて立場が悪くなるのもまずいと思い止まる。まあシズネさんもいる事だし、そう悪い事にはならないだろう、と樂觀的に考えたカナデは、とりあえずさっきの嫌な感じのするお爺さんがどんな人が聞こうと、いつの間にか後ろにいるアイリちゃんの方へ顔を向ける。

「ねえ、アイっ！」

けれど名前を呼びかけようとしたその言葉は最後まで言う事はできなかった。

「うつ、む、あう！」

口元に白い布が当てられている。その事に気づいた時にはすでに意識が朦朧としていた。脳裏に浮かぶのは純粋な疑問。何がどうしてこうなっているのか、理解できない。だってこの家にいるのは私他にはアイリちゃんだけ、つまりこの布を当てているのは……

「ア……イ……や……」

「……………ごめんなさい」

ぼんやりとする視界の中で見えるアイリちゃんの瞳はとても暗いものだった。

(……どう……して?)

(この子も、イヤな気持ち、する)

それは……早く、言ってほしかった、な……。

そして私の意識が遠のいていった。

「……?」

目が覚めた私の視界に入ってきたのは、真っ暗な世界だった。カナデの周囲は布の様なものに囲われている。身体が不安定に揺れている事から、バッグのような物に入れられ、どこかに運ばれているのだと推測する。

(これって誘拐ってやつ!?)

ぼんやりとした意識が現状を理解した瞬間、カナデの覚醒した。おもわず大声を出そうとするが、口には猿轡をかまされており、上手く声を出す事もできない。さらには後ろ手に縄のようなもので縛られており、まともに身動きを取る事もできない。

(どうして……アイリちゃん)

思い出すのは、意識を失う瞬間に見たアイリちゃんの暗く淀んだ瞳。ほんの少し前まで、快活に喋っていた笑顔とは似てもつかないものだった。

そんな事を考えていたら、不意に身体が大きく揺れ、全身に痛み

が走る。

(っ！)

恐らく地面に投げ出されたのだろう。全身に走る痛みで瞳に涙がたまっていく。そして涙は弱い心を揺さぶっていく。わけもわからず異世界に飛ばされてきたカナデが、これまでなんとか前向きに頑張ろうと決意した気持ち、しかしそれはただ誤魔化してきただけだった。異世界という御伽噺のような世界で興奮していただけにすぎないカナデ。特別な人間ではなく、ただの女子高生でしかないカナデが誘拐されて平静を保てるわけもなく、弱気になった心は止まる事を知らずどこまでも落ちていった。

(もうヤダっ……帰りたいよ)

脳裏に浮かぶのは優しい自分のいた世界。平凡な日常は時に不満をもたらす事もあったけれど、失ってから、それがいかに大切で素晴らしい日々だったのか、カナデは今更になって思い知っていた。

(お母さん……お父さん)

カナデは自分が甘やかされて育った事を知っている。たった一人の娘である自分を両親は大切にしてくれた。怒られることも殆ど無く、不自由の無い生活をしていた。そしてそれを当然と思いカナデは享受してきた。困った時はすぐに助けてくれた。欲しいものがあったらすぐに買ってくれた。

気づくとカナデは泣いていた。これからどうなるかわからない恐怖と、自分の知る世界とかけ離れたこの世界の在り様に、辛く、悲しく、寂しく、泣いていた。

16話 死刑宣告（前書き）

お、お久しぶりです（土下座）

3ヶ月ぶりの更新です…お待たせしして、ごめんなさい。
そして待っていていただいた方、ありがとうございます！

16話 死刑宣告

どれくらいそうして泣いていただろうか。気がつくと、バッグに入れられたまま地面に投げ出されてから大分時間がたっているように感じたカナデは、徐々に思考能力を取り戻してゆく。

(……これからどうなるんだろう)

どこかに放置されているのだろうか？ そもそも私はどれくらい気絶していたのだろうか？ そんな自分の今おかれている状況がわからないカナデの不安は、止まることなく加速していく。

恐らく誘拐されたのだろう、それもアリアちゃんによって……その事を思い出してまた心が落ち込んでゆく。確かにちよつとしか話してないのに信用もなにもないけれど、それでもあんなに笑顔で楽しそうに話していた女の子が、裏ではこんな事を考えていたなんて……きつとあの村長たちもグルだったのだろう。そして、シズネさんも……そこまで考えが進むとまた涙が出てきた。さっきの恐怖とはまた違った、胸が痛くなるせつない気持ちに襲われた。いくら短時間とは言っても、その間はお互い笑顔で話していたのだからそれを裏切られたような、虚しいような、苦しいような、悲しいような……そんなぐちゃぐちゃな感情に襲われる。

(何でこんな事になったのかな……)

そもそも私を誘拐してどうしようというのだろうか。この世界の事はよくわからないけれど、身元がわからない自分を誘拐して身代金を要求するといった事は考えにくいと思う。

となると考えられるのは何だろう？ 私に何か利用価値があるとか

……異世界から来たのがばれた？　けど異世界から来たなんて理由だけで人一人さうのだろうか。異世界に来たからといって特別に私に力なんてないように思える。それとも私が気づいていないだけで、何か特別な能力でもあるのだろうか？

（ねえ、ナイちゃん）

そこまで考えて、脳内にいるはずの精霊の事を思い出し声をかける。今の自分がこっちの世界に来た事で、明らかに変化したといえはやはりナイちゃんの事だろう。

（あれ？　ナイちゃん？）

けれどナイちゃんからは何の返事も無かった。

（ナイちゃん！　ナイちゃん！！）

そして何度も何度も呼びかけても、精霊から返事が帰ってくることは無かった。

（ナイちゃんもいなくなっちゃったのかな……）

そういえばナイちゃんはレンファさんの事を助けてあげてっ言っただけ……思わず自嘲するような笑みが浮かぶ。レンファさんの事を傷つけた私に怒って、どこかへ行ってしまったのだろうか。

（罰……なのかな）

会ったばかりの他人でしかない私に優しくしてくれた、そんな人を傷つけた。差し伸べてくれた手を自ら振り払い、泥をかけるよう

な真似をしたんだ……私は。そんな落ち込んでいる私の耳に、自分のお腹が鳴く音が聞こえてくる。

（……は、ははは）

思わず乾いた笑いをしてしまう。こっちの世界に来て何も食べていない。最低でも丸一日以上何も口にしていないのだからお腹もすいて当然だろうけど、それでもこんな時に鳴らなくてもいいのに……自分の間抜けさに嫌気がさす。けれど身体は正直で、一度意識してしまった事はなかなか忘れない。吐き気さえ及ぼすような強烈な空腹に襲われ、さらにはこれまでの疲れも重なった事で、徐々に意識さえ薄れていく。

（……起きたら……もとの世界に……）

そんな淡い希望を思いながら、意識が薄れていく。そして完全に落ちようとした、その瞬間。

（ひゃ！）

急に身体が90度回転した。今まで横向きだった身体が無理やり起こされ、その急激な変化に意識が覚醒する。

（何！ 今度は何なの！！）

パニックになったカナデに、今度は強烈な光が浴びせられる。今まで真っ暗なバッグの中に閉じられていたカナデは、突然の光で視界がばやけて見える。けれどなんとなくは見える視界の中で、誰かがこちらを向いて立っていた。そして恐らくその人が発したであろう声が聞こえてくる。

「なんだあ？ ガキか？」

徐々に明るさに慣れてきたカナデの視線の先には……強面の男性が立っていた。そしてその男性はとてまただの一般人をは思えない容貌だった。顔には無数の傷があり、服装は汚らしく、その一部にはまだ新しいと思える血がついていた。そして男性は頭をがしがしとかきながら、面倒そうな口調で、

「ちつ。どこに売り飛ばすかな」

カナデにとって死刑宣告ともいえる言葉を発したのだった。

16話 死刑宣告（後書き）

タイトルを近々変更しようと思っています……あまりにも話の展開と違ってきたので……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6094n/>

盗賊王女をコーディネート！

2011年4月24日22時44分発行